

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ケラビット語バリオ方言のテキスト : 基本表現を中心として
Auther(s)	武内, 康佳
Citation	ニダバ , 48 : 90 - 98
Issue Date	2019-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047433
Right	
Relation	



ケラビット語バリオ方言のテキスト

—基本表現を中心として—

武 内 康 佳

1. はじめに

ケラビット語バリオ方言はマレーシアのケラビット人によって話されている言語である。オーストロネシア語族、マラヨ・ポリネシア語派に属する言語であるが、言語学的な調査は十分になされていない(Norahim 2013)。言語学的な研究としては、語彙を収集し英語—ケラビット語の語彙集を作成したものや、主に能動態(Actor Voice としている文型)と受動態(Undergoer Voice としている文型)について記述するため調査をしているものがある。しかし、それらの問題点は例文が少なく、日常彼らが使用している表現を記録したテキストがないという点である。

本稿の目的は、ケラビット語のテキストを作成するための一助として、2014年から計3回、通算2か月程度行ったフィールドワークの際に採集した文をまとめ、基本表現集として形に残すことである。

2. インフォーマント

ケラビット人の起源と呼ばれる村のある、バリオ高原でフィールドワークを行った際、バリオアサル村(Bario Asal)でゲストハウスを営むシナラン(Sina Rang)とその息子であるジュリアンラン(Julian Rang)に基本的な文を教えてもらい、例文を確認してもらった。この2人が主なインフォーマントである。シナランは生まれたときからケラビット語を使用する環境にあった。ジュリアンランは幼少時代バリオで生活していたが、長い時間都会で主に英語を用いて生活しており、現在はバリオで主にケラビット語を用いて生活している。

また、この家族が生活しているのはバリオアサル村のロングハウスであり、同じ建物の中、隣の居住スペースで生活している家族からもいくつか表現を収集している。

3. ケラビット語の基本表現

本稿ではケラビット語の基本表現を記述していく。Takeuchi (2016)に基づいたケラビット語での文の表記の下に、グロスをつけ、意味を示す。

3.1. 挨拶

- (1) **pe-tabi?** **lekedtaŋⁱ**
pe-greet morning 「おはようございます」
- (2) **pe-tabi?** **beremedtaŋ**
pe-greet bere-daytime 「おそよう」(遅く起きてきた農民に使った)
- (3) **pe-tabi?** **munad edto**
pe-greet right day 「こんにちは」
- (4) **pe-tabi?** **tuped edto**
pe-greet straight day 「こんにちは」
- (5) **pe-tabi?** **berededtem**
pe-greet pele-daytime 「こんばんは」(夕方)
- (6) **pe-tabi?** **dedtem**
pe-greet night, evening 「こんばんは/おやすみなさい」(夜)
- (7) **pe-tabi?** **rudap**
pe-greet sleep 「おやすみなさい」
- (8) a. **anun balaⁱⁱ**
 what new 「元気ですか(新しいことは何ですか)」
- (8) b. **bala doo?**
 new good 「元気です」
- (9) a. **doo?** **iko**
 good 2.sg. 「元気ですか(あなたは(調子が)良いですか)」
- (9) b. **doo?**
 good 「元気です((調子が)良いです)」
- (9) c. **kapeh teh iko**
 how PT 2.sg. 「あなたはどうですか」
- (9) d. **kapeh muyu**
 how 2.pl. 「あなた(と家族みんな)はどうですか」
- (9) e. **kapeh teh idah**
 how PT 3.pl. 「あなたの家族はどうですか」

(1)~(9)が基本的な挨拶として使用されている表現であるが、村を訪れた親族や旅人に対して、「いつ、どこから来たのか」「どこへ行くのか」「ご飯はもう食べたのか」などをもって挨拶としている場合がみられたため、それについても挨拶とし、載せておく。

- (10) a. let ɲapeh (edto kinih)
 from where (day now) 「(今日は) どこから (来たんですか)」
- (10) b. let Miri (edto kinih)
 from Miri (day now) 「(今日は) ミリから (来ました)」
- (11) a. (me) ɲapeh iko
 (go) where 2.sg. 「あなたはどこへ (行くのですか)」
- (11) b. me ɲi lati?
 go to rice field 「畑へ (行きます)」
- (11) c. muli?
 go home 「家へ帰ります」
- (12) a. paɲeh iko kuman
 already 2.sg. eat 「もう (ごはんを) 食べましたか」
- (12) b. paɲeh (kuman)
 already eat 「もう (食べました)」
- (12) c. beto (kuman)
 yet eat 「まだ (食べていません)」
- (13) idan medtiɲ
 when come 「いつ来たんですか」
- (14) neh medtiɲ idan iko tuje
 PT come when 2.sg. here 「あなたはいつここへ来たんですか」

3.2. 日常会話表現

ここからは、フィールドワーク中に特に高い頻度で観察された、日常的に使用されている表現を述べていく。特に、ケラビット人の間でよく使用されている疑問文や、インフォーマントと生活する中でよく発話された文を載せていく。

まずは疑問文から記述していく。ケラビット語の疑問文で良く出現する *ken* という語は疑問文であることを示す標識であると考えられ、*ken* を伴う疑問文では文頭に *ken* が現れることが確認されている。*ken* は簡略化された疑問文では省略が可能であり、疑問詞と一緒に現れることはない。また、その疑問文の答えとして、「はい」の場合には '*mo*'、「いいえ」の場合には '*na?am*' もしくはその短縮形である '*?am*' を用いて答える。

疑問文の後で他の表現から使用頻度の高かった勧誘文、命令文を紹介していく。

3.2.1. 疑問文

(15) **ken doo? iko**

Q good 2.sg 「あなたは大丈夫ですか」

(16) **ken la iko mirup**

Q want 2.sg drink 「あなたは（何か）飲みたいですか」

(17) **ken mileh iko nuuk ba?o**

Q able 2.sg thread beads 「ビーズワークができますか」

(18) **ken mileh iko karuh Kelabit**

Q able 2.sg language Kelabit 「ケラビット語ができますか」

(19) **ken kareb uih marih tuje**

Q can 1.sg come here 「私がここに来てもいいですか」

(15)～(19)は *ken* を伴う疑問文である。肯定文の語順には揺れがあるが、*ken* を伴った文は主語が *ken* の直後に現れないという特徴が共通している。

続いて、*ken* を使用しない疑問文を紹介していく。(22)～(27)の様に、疑問詞を伴うものがほとんどであるが、(20)や(21)のように疑問詞も *ken* も伴わずに疑問を示すのには、文末に上昇調のイントネーションが必ず現れているようである。

(20) **kareb mula? mula?**

can many many 「たくさん（もらって）いいですか」

(21) **ame ko la rudap**

go 2.sg want sleep 「あなたは寝（に行き）たいですか」

(22) **anun inih**

what this 「これはなんですか」

(23) **ꞑapeh inan**

where exist 「どこにありますか」

(24) **anun sinaruh iko edto kinih**
what si-do, make 2.sg day now 「あなたは今日何をしましたか」

(25) **anun nukenan muyu**
what food 2.pl 「食べ物がありますか (あなたの食べ物は何ですか)」

(26) **iih mawar muiit kereta**
who fast drive car 「誰が (あんなに) 速く車を運転しているの」

(27) **iih wan sinih**
who own this 「これは誰のですか (誰がこれを所有していますか)」

(22)～(27)は全て疑問詞が文頭に来る疑問文である。自然に疑問文を生成する場合は疑問詞が文頭に現れるようであるが、文頭に現れないものも容認される。

(28) **baka kuman anun**
wild boar eat what 「(一般的に) 猪は何を食べますか」

(29) **kuman anun baka**
eat what wild boar 「(今) 猪が食べているのは何ですか」

(28), (29)の例を見ると、疑問詞が文頭に現れていないが、容認されている文である。(28)の文では猪 (baka) が文頭に現れるため、猪に焦点が当たり、一般的な猪が何を食べるのかを尋ねる文になっている。それに対して、(29)では食べる (kuman) が文頭に来るため、食べることに焦点がおかれ、「食べている」という意味になっている。文頭に来る語彙に焦点が置かれている様である。(29)の様な「動詞+疑問詞+主語」という構造はすでに挨拶化した(11a)の「どこへ行くんですか」と類似している。

3.2.2. 勧誘文

ここからは、勧誘の文を載せていく。ケラビットの勧誘表現には動詞の語形変化は現れず、英語の Let's～やマレーシア語の Mari～の様な定形表現もない。特徴的であるのは主語となる代名詞である。

(30) **kuman tauh**
eat 1.pl.many 「食べましょう」

(31) **me lati? kitah**
go rice field 1.pl.incl.two 「(私たち二人で) 田んぼへ行きましょう」

(32) **me lati? kediwah**
go rice field 1.pl.excl.two 「(私たち二人は) 田んぼへ行きます」

(33) **tepu Nawan, iko kuman ruyun kamih, ken tepu Sina Rang**
grandfather Nawan 2.sg eat together 1.pl.ex PT grandmother Sina Rang
「ナワンおじいさん、私たちと一緒に食べましょう、シナランおばあちゃんのところで」

ケラビット語には他のオーストロネシア語族と同様に 1 人称代名詞に包括形と除外形をもつ。主語に 1 人称の包括形を用いることで勧誘を表すようである。(32)の様に除外形を使うと勧誘とは全く別の意味になる。(33)のような命令のような勧誘をする場合は「(除外形の) 私たちと一緒に」という表現を用いており、他と比較すると特殊である。全体的には動詞が文頭に置かれることが多いようである。

3.2.3. 命令文

次に、ケラビット語の命令文を見る。ケラビット語の命令文は代名詞 *iko* 「あなた」を伴う場合と伴わない場合がある。

(34) **naru sebulan, na?am naik**
do, make yourself NEG wait 「待たずに自分でしなさい」

(35) **kuman iko**
eat 2.sg 「食べなさい」

(36) **nani Penan kiko**
sing Penan 2.sg 「ペナンの歌を歌って」

(36)はケラビット人 2 人の会話で、1 人がもう 1 人にペナン人の歌を歌うように頼んでいる場面である。ケラビット語では particle として *teh* や *neh* がよくあらわれるが、この文における *kiko* の前半部分も particle と思われる。焦点に関わる重要な語であるようだが、これらについての研究はまだ存在しないため、今後より多くの例文を収集して調査する必要があるだろう。

(37) tepu Ulo, ?am me lati. tudo ŋan uih
 grandmother Ulo, NEG go rice field sit with me
 「ウロおばあちゃん田んぼへ行かないで。私と座ろう。」

(38) ?am da?at pian
 NEG bad like, happy 「悲しそうにしないで」

(39) ian ni?er
 imp.NEG see 「見るな」

(37),(38)では否定辞の *na?am*(および短縮形の *?am*)によって否定の命令文(つまり禁止文)が作られているが、(39)では禁止の意味をもつ *ian* が用いられている。文の構造としては「*na?am/ian* + 動詞」の形で同じであるが、どのような場合において *ian* のみが用いられるのか、さらに研究する必要があるだろう。

3.2.4. 形容詞を含む文

最後に、疑問や勧誘、命令ではないが、ケラビット語において特徴的な形容詞を用いた文を紹介する。ケラビット語の表現で英語の形容詞として訳されているものには2つの形式がある。1つは単純に1語で名詞を形容するものである。もう1つが2語で構成されているもので、*doo?* 'good' または *da?at* 'bad' と他の語を組み合わせる名詞を形容するものである。

(40) la?uh uih
 hungry 1.sg 「私はお腹が空きました」

(41) ba?ur uih
 full 1.sg 「私はお腹がいっぱいです」

(42) i?it karuh mudih
 small, little language, speak 2.sg.GEN 「あなたの声は小さい」

(43) teneb mawer bariu
 cold fast wind 「風が強くて寒いです」

(44) pen suk bili uih pelaba mikat
 pen REL buy 1.sg too difficult 「私が買ったペンはとても高い」

- (45) *doo?* *ribed* *topi mudih*
 good beautiful hat 2.sg.GEN 「あなたの帽子はきれいです」
- (46) *doo?* *nani iko, tepu*
 good song 2.sg grandmother 「おばあちゃん、歌が上手ですね。」
- (47) *doo?* *ain ba?un sinih*
 good sweet,taste banana here 「このバナナは甘い (甘くておいしい)」
- (48) *labo baka senunuh tepu laba doo? ain*
 meat wild boar se-grill grandmother too good sweet,taste
 「おばあちゃんが焼いた猪の肉はとてもおいしい」
- (49) *edto kinih da?at mukul uih*
 day now bad ? 1.sg 「今日私は怠けたい」
- (50) *doo? mukul iah*
 good ? 3.sg 「彼/彼女は働き者だ」

どの形容詞の文でも、関係節を導く *suk* を含んだ、主語が長い文は主語となる名詞が文のはじめに現れるが、単純な文では形容詞が文頭に現れている。(49), (50)の様に *mukul* 単独では使用されず、意味も説明できないが、*da?at* と共に使用されることで「怠ける」という意味になり、*doo?* と使用されることで「熱心に働く」という対義語になる例がある。これらは文中で形容詞のように働くので、Amster (1995)によるケラビットの語彙集では形容詞として記述されている。このような形容詞に関する研究もしていく必要があるだろう。

4. まとめ

以上、ケラビット語の基本表現を約 50 例紹介した。本稿では記述できる例文の数が限られていたことや、接辞については未だ機能が明らかになっていないため、可能な限り単純な文から紹介していった。その結果、ケラビットのコミュニティで日常的に使用されている文について見ていくことができた。このような単純なものであっても、今までまとまって記述されたケラビット語のテキストが存在しなかったため、ケラビット語の記述・保存という点から見てもこれからの足掛かりを作ることができたのではないだろうかと考える。

しかしながら、これからより詳しく体系的な言語の記述を行うためにはより複雑な文の収集も行っていかなければならない。

略号／記号

1,2,3...	人称（それぞれ 1 人称、2 人称、3 人称）
sg	単数
pl	複数
two	2（人称代名詞の数）
three	3（人称代名詞の数）
many	4 以上（人称代名詞の数）
incl	包括形
excl	除外形
imp	命令
GEN	属格
NEG	否定
PT	Particle
REL	関係節
Q	疑問

i (1)~(7)のあいさつの例文は、現在日常的に使用されている挨拶であるが、マレーシア語の「Selamat+朝/昼/晩」のあいさつからその体系を引用したと言われている。

ii (8a, b)の表現は周辺言語であるルンバワン語(Lun Bawang)と言われている。元々ケラビットの表現としては(9a)の *doo? iko* が用いられていた様であるが、現在はどちらも日常的に用いられる。

参考文献

- Amster, Matthew H. (1995). *Kelabit/English English/Kelabit Glossary A Concise Guide To The Kelabit Lanugage*. Kuching: Rurum Kelabit Sawarak.
- Norahim Norazuna (2013) *A Preliminary Review of Research on Language and Dialects*. Kuching: Centre of Language Studies Universiti Malaysia Sarawak
- Simons, Gary F. and Charles D. Fennig (eds.). (2018). *Ethnologue: Languages of the World*, Twenty-first edition. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com>.
- Takeuchi Yasuka (2016). A Descriptive Study of the Kelabit Bario Dialect. *Nidaba* No.45 39-48: Linguistic Society of West Japan.